

# 豊橋ハリストス正教会聖堂の施工に関わった職人について

—大工棟梁の中神米作と富次を中心に—

伊藤 晴 康

## 1. はじめに

日本におけるハリストス正教会の建築活動については、坂田泉氏の研究を嚆矢とし<sup>1</sup>それを鈴木甲子男氏が引き継ぎ<sup>2</sup>この二人によって関係文献資料が収集分析され、全貌がおよそ明らかになってきた。しかしながら、個々の聖堂の建築的詳細については未詳であり、最近になって東京聖堂（いわゆるニコライ堂）がその修理修復を契機に<sup>3</sup>、また豊橋聖堂ではその文化財への登録申請<sup>4</sup>を契機にそれぞれ関係資料の徹底収集分析や実測調査によって設計や建設の経緯などが解明された。

豊橋聖堂に関する上記研究に筆者も参加し、教会誌の解読分析により同会聖職者の河村伊蔵が懇切丁寧な工事監理を行い、また上棟式写真から木工事は中神姓の大工が担ったことを明らかにした。瀬口哲夫氏はこの棟梁を中神米作と紹介しているが<sup>5</sup>、どのような人物であったのかは不明なままである。本研究では、この大工をはじめとして聖堂建設に関わった職人たちを特定し、彼らがどのような職人であったのかを遺族への聞き取りやさらなる関連資料の収集分析により明らかにする。

## 2. 中神米作及び富次の出自について

米作の遺族が豊橋市内に在住であることを知り、2回聞き取りを行った。1回目は平成25年6月2日に米作の息子である富次の長女、富次の次男の妻他から、2回目は平成26年2月8日に富次の長女から、米作と富次について話を伺った。その結果、中神米作が大工棟梁で

---

1 坂田泉「日本におけるハリストス正教会の建築について 最近発見・発刊された資料による建設経緯と設計の分析」『日本建築学会論文報告集』第103号、1964年。

2 鈴木甲子男「正教会の聖堂建築（八）」『正教時報』1982年9月号、正教時報社、pp. 6-11 他15編。

3 文化財建造物保存技術協会『重要文化財日本ハリストス正教会教団復活大聖堂（ニコライ堂）保存修理工事報告書』、日本ハリストス正教会教団、1998年。

4 豊橋ハリストス正教会聖堂建築調査団『愛知県指定有形文化財 豊橋ハリストス正教会聖使徒福音者馬太聖堂建築調査報告書』豊橋市教育委員会 美術博物館、2007年。

泉田英雄・伊藤晴康・西澤泰彦「豊橋ハリストス正教会の聖堂建築の研究」『日本建築学会計画系論文集』第75巻 第654号、2010年8月、pp. 1997-2005。

5 瀬口哲夫・竺覚暁編『近代建築ガイドブック東海・北陸編』鹿島出版会、1985年、p. 108。

あったことに加えて、米作の長男富次も共に施工に携わったことが確認された。さらに、富次が回想録『故山の思い出』<sup>6</sup>を執筆していたことがわかり、この資料からも中神米作・富次親子についての情報が得られた。

『故山の思い出』は、昭和42年(1967年)に晩年の富次が執筆し、豊橋市図書館に寄贈したものである。現在、豊橋市中央図書館に郷土資料として保管されている。手書きで便箋にカーボン紙を用いて転写されたものが紐とじ製本されている。表題にある通り、自らの故郷の風土や人物の思い出話が主題であり、豊橋聖堂に関する記述は見られない。

聞き取りの際、過去帳<sup>7</sup>を拜見することができ、それによれば米作は文久3年(1863年)生まれ、昭和20年(1945年)没、また富次は明治26年(1893年)生まれ、昭和43年(1968年)没であることが判明した。また、米作は田原市六連町百々に住む神藤兵作の三男であったが、中神家に養子に入ったことになっている。

『故山の思い出』によれば、中神家は、渥美郡杉山村(現在の豊橋市杉山町)を故郷に持つ。同書中、米作の義父中神彦四郎は杉山村で商人をしていた旨の記述がある<sup>8</sup>。したがって中神家としては、米作が初めて大工となったと推定される。また、富次は同書中、父米作について次のように記述している。「私の父は建築業をして居ましたが、こんな田舎に居たのでは成巧は覚束無いと決心して、店の商いは年寄りが営んで居るので、明治三十年頃花田村字西宿(駅前大通り一丁目)一番地に屋敷を構えて父母は、私を残して此の処に移住したのであった、父は弟子、私人等十数人置いて盛大に、住宅、学校、神社、佛閣等に至る迄で、堅実一貫の精神で業務に専念して信用と得意を得て近郷屈指の棟梁として飛躍した父であつた」<sup>9</sup>。

また、富次自身の建築修業については、次の記述がみられる。「其の先私は杉山村より時々父母の元に連れられて来たので小供心にも豊橋の昔の思いでは大きかった、其の後私は時代に沿った西洋建築の修業のため東京に三年餘り学んで来て父の業に従事した。」<sup>10</sup>

遺族<sup>11</sup>への聞き取りによれば、富次は豊橋聖堂の仕事が入ったという理由で東京から豊橋に呼び戻されたとのことである。また、富次が「西洋建築の修業」と書いているのは、棟梁への弟子入りではなく、建築の学校での修学を意味する。しかしその学校名は聞いていないとのことであった。なお、中神米作、富次共にハリストス正教会の信者ではなかったとのことである。

### 3. 中神米作と富次の仕事について

米作と富次は明治後半から昭和前半まで豊橋市内で大工業を営み、大正初期にはハリストス正教会豊橋聖堂の建設も担ったことから、地元ではそれ相応の信頼のあった大工と考え

6 中神富次『故山の思い出』私家版、1967年(豊橋市中央図書館所蔵)。

7 江戸時代末期から昭和初期までの中神家家族が記されている。

8 『故山の思い出』pp. 52-55。

9 同書p. 140とp. 141の間に挿入されている目次他。(以下、同書からは原文のまま引用。)

10 同上。

11 遺族のうち、富次と同居していた二男(故人)の妻が、富次が話していたことを記憶していた。

られる。『故山の思い出』によれば、米作は明治27年（1894年）頃に杉山村字殿村に素戔稚神社の社を建てたことになっている<sup>12</sup>。しかしながら、この神社はその後大正2年（1927年）に杉山八幡神社に合祀<sup>13</sup>され、建物は残っていない。

また、大正5年（1916年）に豊橋市羽田町に英霊殿が建設された際に富次が参加したとの記述<sup>14</sup>もある。現在の英霊殿は同市内の向山墓地の隣接地に移転しているが、英霊殿の住職奥田知正氏に伺ったところ、現在の仏堂は昭和35年に羽田より解体移転してきたとのことである。寺に保管されていた冊子に掲載されていた大正7年（1918年）9月及び大正12年（1923年）5月の日付のある写真の仏堂と現在の仏堂を比較して、両者が類似していることが確認できた。現在の仏堂は平成20年（2008年）に耐震補強工事を施したとのことであるが、部分的な補強のみを行っており、大規模な修繕ではないとのことである。なお、仏堂の棟札については見つからなかった。

この他『故山の思い出』には、第二次世界大戦による空襲で焼失した豊橋市の西宿子育地蔵尊の仮堂を富次が建てたとの記述<sup>15</sup>がある。しかしこの仮堂は昭和38年（1963年）に建て替えられており、富次が建てた仏堂は現存しない。

別の資料として、豊橋市内にある神社の棟札を網羅した『豊橋市神社棟札集成』<sup>16</sup>に掲載された棟梁・大工の氏名を確認してみたところ、「中神米作」あるいは「中神富次」（表-1注記1を参照）の記載がある棟札が5例見つかった。当該建物が現存するか否かを別途調査した結果を含め、表-1にまとめた。

杉山町の八幡社の拝殿については、大正14年（1925年）に上棟式がおこなわれた建物が現存している旨を宮司花井啓眞氏より伺った。また、杉山校区の校区史『校区のあゆみ 杉山』にも杉山八幡社について「現在の社殿は、大正14年に再建したものである」との記述<sup>17</sup>が見られる。

赤沢神社については、境内に設置されている「赤澤神社 鎮座」と題した石碑に刻まれた御由緒書の中に「平成の御代を迎え 氏子総意による本社御造営の議が起り ここに本社を始め 末社 社務所 鳥居 手水舎 参道に至る迄の新装となり 神域は一層の崇高さを増し氏子崇敬者は神徳の益々の発揚を仰ぐこととなった」との記述がある。また、宮司鈴木源一郎氏に確認しても、境内には明治時代の社殿は残っていないとのことであった。

小池神社については、中神米作・富次の名は、本殿の棟札に見られるほか、幣殿及び社務所の棟札にも残されている。小池神社境内に設置されている石碑には、「社殿の修補創立以来十有二度行い現在の神殿は明治四十二年七月の修補によるものである」との記述がある。また、『豊橋市神社棟札集成』に小池神社本殿の棟札で明治42年（1909年）以降のものは掲載されていない。そのため現存している本殿は、中神米作・富次が施工したものと判断で

12 『故山の思い出』 p. 42.

13 愛知県渥美郡役所編『渥美郡史』復刻版 臨川書店、1987年、p. 928参照。

14 『故山の思い出』 p. 140とp. 141の間に挿入されている地図の裏面の説明書き。

15 『故山の思い出』 pp. 179-180.

16 鈴木源一郎編『豊橋市神社棟札集成』愛知県神社庁 豊橋支部、2001年。

17 杉山校区総代会 杉山校区史編集委員会編『校区のあゆみ 杉山』豊橋市総代会、2006年、p. 43.

表-1 『豊橋市神社棟札集成』に見られる中神米作・富次の名前が記載された棟札の一覧

神社名称 (所在地)	棟札の記載内容抜粋	掲載頁	現状
八幡社 (豊橋市杉山町字 御園8番地)	(表) 奉改装八幡社拝殿 (裏) 大正十四年四月三日 上棟式執行 棟梁 牛久保町 岡田五左衛門□□□ 脇棟梁 杉山村 <u>中神米作</u> 豊長	p. 163	現存
赤沢神社 (豊橋市東赤沢町 東横根68番地)	(表) 奉改造三河國渥美郡高豊村大字赤澤 村社赤澤神社本殿幣拝殿各壹宇 明治四十三年庚戌三月十五日午前二時遷宮 (裏) 大工棟梁 杉山村 牧野九市 同脇棟梁 <u>中神米作</u>	p. 185	現存せず
小池神社 (豊橋市小池町字 山田川13番地)	(表) 明治四十二己酉歳七月十九日遷宮 奉改造素戔嗚社本殿壹宇 大工棟梁 <u>中神米作</u> 脇棟梁 安田貞次 高橋寶太郎 高崎喜平 (大工11人のうち6番目) <u>中神富次</u>	p. 260	現存
	(表) 明治四十二年己酉歳七月十九日 修繕 奉改造素戔嗚社幣殿並社務所 祭具長家 土堀 大工棟梁 <u>中神米作</u> 脇 齋藤源吉 <u>中神富次</u>	p. 261	現存せず
琴平神社 (豊橋市中岩田1丁 目13番地の11)	(表) 奉改築琴平神社拝殿 壹棟 大工棟梁 豊橋市花田町 <u>中神米作</u> (裏) 昭和参年四月壹日上棟式祭 大工 (23人の筆頭) <u>中神富次</u> (注記2参照)	pp. 318-319	現存

注記：

- 『豊橋市神社棟札集成』には、中神富次の「富」の文字は、全てわかんむりの「富」として記載されている。一方自筆と思われる『故山の思い出』背表紙にある著者名にはうかんむりの「富」が用いられている。このため、本稿では「中神富次」という表記を基本とし、表-1に限り「中神富次」の表記を用いた。
- 琴平神社の棟札については、『豊橋市神社棟札集成』当該箇所には「中神富次郎」と記載されていたが、本稿執筆にあたり棟札を確認したところ「中神富次」と表示されていた。

きる。一方、社務所については、昭和48年（1973年）に新しい社務所を上棟した際の棟札が『豊橋市神社棟札集成』に掲載されている<sup>18</sup>。故に中神米作・富次が建設した社務所は現存しないと考えられる。幣殿については、前述の石碑に「尚現在の拝殿幣殿は大正十三年の改築によるものである」との記述がある。また、石碑の記載と異なるが、『豊橋市神社棟札集成』には、「奉改築村社小池神社幣殿一字 昭和五年拾月拾日上棟式執行」と記された棟札が掲載されており、この棟札には、別の大工の名前が表示されている<sup>19</sup>。従って、中神米作・富次の施工した幣殿は現存しないと考えられる。

琴平神社の拝殿に関しては、宮司岩瀬篤氏に確認したところ、棟札に記載のある建物が現存しているとのことである。棟札裏面に「昭和参年四月壹日上棟式祭 大正拾四年四月起工 昭和参年四月竣工 工費弍萬五千圓也」と表示されている。また、大工23名の名前があるほか、木挽3名、車力9名、金具師1名、石工8名、屋根師2名、瓦葺師1名、瓦師5名、鬼瓦師1名の名前が表示されている。棟札表面には「改造」とあるが、工期が3年間かかっていること、工費が昭和3年（1928年）の時点で2万5千円と高額であること、そして多くの職人が工事にかかわっていることから、この工事は小規模な改造ではなく、実質的には新築であったと推察される。

#### 4. 中神米作と一緒に仕事をした大工について

『豊橋市神社棟札集成』に記載された大工職人の名前から、米作と共に仕事をしていた大工職人が確認できる。棟札に米作と共に2回以上名前が掲載されている人物を表-2に示す。

表-2 中神米作と共に棟札に2回以上掲載されている大工職人

回数	名前	神社名（棟札に表示された竣工年）
4	中神富次	小池神社本殿・社務所（明治42年）、赤澤神社（明治43年）、琴平神社（昭和3年）
3	森田常次郎	小池神社本殿（明治42年）、八幡社（大正14年）、琴平神社（昭和3年）
2	朝倉駒吉	赤澤神社（明治43年）、琴平神社（昭和3年）
2	木下次郎	八幡社（大正14年）、琴平神社（昭和3年）
2	菰田 廉	小池神社本殿（明治42年）、赤澤神社（明治43年）
2	菰田佐市	小池神社本殿（明治42年）、赤澤神社（明治43年）
2	菰田名徳	小池神社本殿（明治42年）、赤澤神社（明治43年）
2	齋藤源吉	小池神社本殿・社務所（明治42年）
2	杉山 正	八幡社（大正14年）、琴平神社（昭和3年）
2	高崎喜平	小池神社本殿（明治42年）、赤澤神社（明治43年）
2	中神常治	八幡社（大正14年）、琴平神社（昭和3年）

18 同書, p. 1073.

19 棟札表面に「棟梁 及部道次郎 中野嘉一郎」との記載がある。

これらの者のうち、中神常治は米作の二男であることが聞き取りにより確認できた<sup>20</sup>。また、琴平神社の棟札にのみ名前が認められる中神儀一が米作の娘婿であることも同様に確認された。琴平神社の棟札では、棟梁（米作）と副棟梁が表面に表示されており、裏面には、大工の項目の筆頭に富次が表示され、その隣に常治、儀一の名前が並んでいる。このことから、中神一家の建設業は、棟梁の下で息子の世代の親族が補佐役となって営まれていたことが窺い知れる。一方、左官、瓦師、石工で2回以上米作と共に棟札に名前のある者は見つからなかった。

## 5. 中神米作の腕前と仕事内容について

大工棟梁として、米作が当時この地域でどのような位置づけであったのかを調査する目的で、明治元年（1868年）から昭和20年（1945年）までに『豊橋市神社棟札集成』の第一編・本社編の中の棟札に掲載されている大工棟梁を調査した。その結果、「棟梁」（大工の筆頭を含む）あるいは「脇棟梁」として210人を確認することができた。このうち、2回以上「棟梁」あるいは「脇棟梁」として掲載されている人物は41人である。この中で米作は5番目に多い5回（棟梁として3回、脇棟梁として2回、他の1名と同順）掲載されており、当時の当地域での大工棟梁としては比較的多くの神社で仕事を行っている。表-3に、記名された棟札の多い者の一覧を示す。

なお、仲彰一著『崇山獅子正宗善寺誌』<sup>21</sup>によれば、表-2中2番目に記載された岡田五左衛門は著名な宮大工であり、徳川家康に招かれて長篠城、浜松城、駿府城、名古屋城等の造営に活躍した初代岡田太郎左衛門を先祖に持ち、牛久保町に居住した二代目から岡田五左衛門（五代目と六代目は太郎左衛門）の名を代々襲名している。また、表-1に示したとおり岡田五左衛門<sup>22</sup>が棟梁を務めた大正14年（1925年）の八幡社（杉山町）拝殿の工事では、米作が脇棟梁を務めている。八幡社（杉山町）は、米作がかかわった神社の中では最も格式が高く<sup>23</sup>、著名な宮大工である岡田五左衛門が棟梁となっているので、米作が脇棟梁となっていると考えられる。

米作が脇棟梁を務めたのは、この他、明治43年（1910年）の赤澤神社の建設である。米作は前年に小池神社本殿、幣殿及び社務所の建設で棟梁を務めた経験があったにもかかわらず赤澤神社では脇棟梁となっている理由は不明である。赤澤神社の棟梁として記載されている牧野九市の名は『豊橋市神社棟札集成』第一編・本社編の中で、棟梁あるいは脇棟梁としては他に見当らなかった。

20 2回目の聞き取りの際、富次の長女に確認した。

21 仲彰一『崇山獅子正宗善寺誌』臨濟宗正宗寺、1981年、pp. 328-332。

22 『崇山獅子正宗善寺誌』によれば、十三代目は明治35年（1902年）生まれ、十二代目は生没年不明とすることであるので、この五左衛門は十二代目か十三代目と思われる。

23 八幡社（杉山町）は八等級社であるのに対し、他の神社は九等級社と十等級社である。

表-3 市内の神社棟札に棟梁・脇棟梁として多く名前の出てくる人物

順位	氏名	棟梁	脇棟梁	合計	棟札に棟梁又は脇棟梁として名前のある神社 ( )内は町名
1	高木清左衛門	15	0	15	正八幡社(石巻本町), 琴平神社(中岩田), 梶本八幡社(石巻本町), 春日神社(多米東町), 白土社(嵩山町), 素戔鳴神社(下条西町字西郷), 安海熊野社(魚町), 小島神社(小島町), 神明社(東小鷹野町), 神明社(牛川町), 八幡神社(二川)
2	岡田五左衛門	11	0	11	老津神社(老津町), 熊野神社(飯村北), 神明社(清須町), 素戔鳴神社(長瀬町), 鹿嶋神社(雲谷町), 市杵島社(牟呂町), 八幡社(杉山町), 八柱神社(細谷町), 八幡社(佐藤五丁目)
3	石黒小市	6	1	7	八幡社(野依町), 菱木野天神社(日色野町), 水神社(三ツ相町), 神明社(新栄町), 素戔鳴社(王ヶ崎町)
4	伊藤利安	6	0	6	高蘆神明社(高師本郷町), 諏訪神社(山田町), 神明社(前田南町), 高師神社(西高師町), 素戔鳴社(王ヶ崎町)
5	彦坂釜男	5	0	5	八柱神社(東細谷町), 日吉神社(岩崎町), 原川社(嵩山町)
5	中神米作	3	2	5	赤沢神社(東赤沢町), 小池神社(小池町), 琴平神社(中岩田), 八幡社(杉山町)
7	伊藤勝三郎	2	2	4	神明社(前芝町), 篋矢神社(石巻本町)
7	及部道次郎	4	0	4	安久美神戸神明社(八町通), 大岩神明宮(大岩町), 小池神社(小池町)
7	竹尾和三郎	4	0	4	豊麻神社(下地町), 熊野神社(飯村北), 白山社(寺沢町)
7	花田喜親	4	0	4	東頭神社(石巻町), 進雄神社(横須賀町), 青木神社(北島町), 進雄社(小松原町)

注記：『豊橋市神社棟札集成』第一編・本社編に掲載された神社のうち、明治元年から昭和20年までの間の棟札で集計した。棟梁には、大工として筆頭に掲載された者も含む。

一方、建築請負業者としての規模の大きさは、当時の「(豊橋)商工人名録」(出版年により「豊橋商工名」,「商工業者人名」等の異なる表記がある)に記載されている営業税納税額により推定される。「(豊橋)商工人名録」は、当時毎年発行されていた『豊橋商工案内』の中に掲載されており、業種ごとに氏名、営業所住所、営業税額等が表示されている。

「請負」の項目について、入手可能であった大正10年版から昭和16年版までを調査してみたところ、大正10年版から大正14年版までは中神米作が、昭和2年以降は中神富次が掲載されている。掲載の基準が当該年度の営業税額であると推察され、大正15年版、昭和7年版、及び昭和12年版以降には掲載されていない。なお、表示されている住所は花田町西宿であるが、大正13年版と大正14年版のみ花田町間田となっている。また「商號」の欄に⊗と記載されている場合もある<sup>24</sup>。豊橋聖堂の上棟式の写真でも、大工が着ている印袴纏に「米」の文字が確認できる。

豊橋聖堂建設時期に最も近い大正10年版では、米作は請負の項目中、営業税納税額で6番

24 昭和5年版, 6年版, 8年版, 9年版, 10年版に記載あり。

目（6, 7, 8番目は同額）に多い額となっている。（表-4）ただし、請負の項目には、土木請負も含まれており、土木請負を除外すると4番目（4, 5番目は同額）に多い納税額である。また、当時の豊橋市域が現在よりも狭い範囲であったことも関係するが、表-3に示した神社の工事実績が多い棟梁・脇棟梁のうち、米作以外は表-4に名前が見当たらない。『故山の思い出』に「弟子、私人等十数人置いて盛大に、住宅、学校、神社、佛閣等に至る迄で、堅実一貫の精神で業務に専念して信用と得意を得て近郷屈指の棟梁として飛躍した」<sup>25</sup>と記載されていた通り、神社に限らず幅広い工事を担当していた様子が窺われる。

表-4 『豊橋商工案内』大正10年版の「豊橋商工名」〈請負〉の項目に掲載されていた業者

順位	営業種目	氏名	営業所	営業税
1	請負	榎嶋吉三郎	東新	167.90
2	建築請負	疋田惣三郎	吉屋	77.99
3	同	河合兵十	花田（松山）	41.50
4	土木請負	戸田彌平	花田（城海津）	37.10
5	同	西土要次郎	下地	29.07
6	同	芳村竹次郎	船	22.00
6	建築請負	小笠原初次	旭	22.00
6	同	中神米作	花田（西宿）	22.00
9	請負業	松井休太郎	東新	20.40
10	代理業石炭切出	齋藤仙太郎	湊	20.00

中神家には、「土木建築設計工事 請負 中神建築事務所 中神富次」と印刷された封筒が残されている。また、『豊橋商工案内』に掲載された業者名に付される営業種目の表記が昭和6年版<sup>26</sup>までは「建築請負」あるいは「建築」となっているのに対し、昭和8年版以降は「土木建築請負」となっている。これらのことから、後継者の富次の時代になってからは次第に設計や土木請負も含めた総合建設業に業務の幅を広げていったと推察される。

聞き取りによれば、戦争の激化に伴い職人達が徴兵されるようになり、富次の代で建設業を廃業したとのことである。前述の通り、『豊橋商工案内』への掲載も昭和11年版が最後となっている。終戦後、富次は建設業組合で仕事をしていたとのことである。また、花田町西宿に木造三階建ての社屋を所有していたが、この社屋は戦災で焼失している。

## 6. 豊橋聖堂の建設に関わった他の職人について

教会誌に、大正元年（1912年）12月3日付で、「午後二時、河村福輔祭出立、帰京せらる。大工、石工、屋根、鳶、左官等の契約済となる。」との記載がある。従って豊橋聖堂の建築

25 『故山の思い出』p. 140とp. 141の間に挿入されている目次他。

26 大正12年版のみ右欄の「土木建築請負」の表記に並んで「全」となっている。

工事は、河村伊蔵の監理の元で工事種別ごとに契約が行われたことがわかる。しかしながら、中神米作による大工工事以外の施工者は不明である。

また、教会誌には、本体工事とは別途に発注された門と柵等についての記録がある。大正3年（1914年）1月9日の記録には、「同夜七時より聖堂建築委員会、教会にて開催。門と柵及司祭住宅と井戸やかた等の協議あり。会計より大体の支払金及残余金、今後の金融につき報告あり。門と柵の件につきては、河村氏を依頼して着手することにし、住宅及其他は田中氏に一任することに決す。」とある。また、同月16日の記録には「午後二時、建築委員会を開催、全員集会。河村氏より開票の結果の報告あり。石工は桜井、二百六十三円、鉄柵は余、二百十二円三銭と契約することと決定せり。同夜、河村氏帰京。」とある<sup>27</sup>。「開票」との記述から、業者の選定は入札によって行われたと推察される。なお、この門と柵は現存していないが、正門の正面及び平面を描いた図面と、門の上部飾りを描いた図面<sup>28</sup>が残されている。

鉄柵を受注した余とは、当時市内鍛冶町で営業していた山六鐵工所のことを指すと考えられる。大正15年版の『豊橋商工案内』に掲載された「豊橋商工人名録」の中で「鐵工、鍛冶、鋳物業」の項目に、余の屋号と共に平石丈三郎という名前が記載されている<sup>29</sup>。また、同書には山六鐵工所の広告も掲載<sup>30</sup>されている。山六鐵工所については、豊橋を中心とした地域に残る火の見櫓の銘板に山六鐵工所のものが多いという記述が、内藤昌康著『火の見櫓慕情』<sup>31</sup>に見られる。なお、平石丈三郎という名前は教会日誌には見あたらず、他にもハリストス正教会との関係を示す資料は発見されていない。石工の桜井という業者に関しても、資料が見つからなかった。

この他、豊橋聖堂の工事に関わった可能性がある人物としては、ハリストス正教会の信者であり、当時建築資材を扱っていた平石長十郎（ワルワナ平石）が挙げられる。長十郎は明治34年（1901年）に豊橋教会の執事<sup>32</sup>に選出されるなど、熱心な信者である一方、「菊一屋」という屋号でガラス製品を扱っていた。明治27年（1894年）発行の『愛知県実業家人名録』<sup>33</sup>にある平石長十郎の項目には、「ランプ類硝子板ペンキ類 豊橋本町 菊一屋 平石長十郎」と記載されている。また、「豊橋商工人名録」硝子商の項目にも平石長十郎の名前が掲載されている<sup>34</sup>。このことから、豊橋聖堂建設にあたって菊一屋がガス灯、板硝子及び

27 秦基「豊橋ハリストス正教会教会誌Ⅳ」『豊橋市美術博物館研究紀要』5号、豊橋市美術博物館、1996年、pp. 86-87.

28 『愛知県指定有形文化財 豊橋ハリストス正教会聖使徒福音者馬太聖堂建築調査報告書』資料編〔12〕〔13〕参照。

29 『豊橋商工案内』大正15年版、p. 153。同書に掲載されている「豊橋商工人名録」の「鐵工、鍛冶、鋳物業」の項目に平石丈三郎という名前は、大正10年版から掲載されているが、同項目に余という屋号が掲載されるのは大正15年版からである。

30 『豊橋商工案内』大正15年版、p. 32とp. 33の間。

31 内藤昌康『火の見櫓慕情』春夏秋冬叢書、2008年、p. 242。

32 秦基「豊橋ハリストス正教会教会誌Ⅱ」『豊橋市美術博物館研究紀要』3号、豊橋市美術博物館、1994年、p. 43。ワルワナ平石がペトル田中と共に執事に選出された旨の記載がある。ワルワナ平石が平石長十郎である旨は、秦基「豊橋ハリストス正教会教会誌Ⅰ」の筆者による注記に記載がある。

33 小尾堅之助編『愛知県実業家人名録』愛知博文社、1894年、p. 301。

34 『豊橋商工案内』大正10年版から13年版まで。

ペンキを納品した可能性が高いと考えられるが、菊一屋と豊橋聖堂の工事との関係を示す資料は見つかっていない。

## 7. まとめ

本稿により、豊橋聖堂の施工者として名前が知られていた中神米作は、大工棟梁として3枚、脇棟梁として2枚の神社棟札に名を残していたほか、『豊橋商工案内』にも継続的に掲載されており、当地域で比較的大規模に建設業を営んでいたことが確認された。また、米作の子富次も豊橋聖堂の施工に協力していたことが明らかになった。このほか、建築工事以外の付帯工事として鉄柵の施工を行った山六鐵工所についての知見も得られた。

今後の課題としては、商人の家に養子に入った米作がどこで大工の修業をしたのか解明することが必要であろう。また、中神富次が東京で学んだ建築学校を特定し、学んだ内容について把握して、豊橋聖堂施工における富次の役割を明らかにしたい。

## 謝 辞

本稿を執筆するに当たり、多くの方々にお世話になった。名古屋大学の西澤泰彦先生と豊橋技術科学大学の泉田英雄先生には、中神家への1回目の聞き取りにご同行いただいたほか、研究上のご助言を賜った。豊橋ハリストス正教会執事の伊藤英一氏からは、教会の歴史に関するお話を伺った。郷土史家の吉川利明先生は、中神米作の遺族に関する情報をご提供くださった。中神家の皆様には聞き取りにご協力をいただいた。英霊殿の奥田知正住職には、仏堂移築に関する情報をいただいた。郷土史家で赤沢神社宮司でもある鈴木源一郎先生には、赤沢神社社殿の由緒を伺った。琴平神社の岩瀬篤宮司には、棟札の確認でお世話になった。杉山八幡の花井啓眞宮司には、拝殿に関する情報をいただいた。篤く御礼を申し上げたい。

また、本稿を執筆する契機となった「豊橋ハリストス正教会聖堂100歳」記念講演会を企画していただいた豊橋市美術博物館文化財センター学芸員の小林久彦氏にも併せて御礼を申し上げます。

## 参考文献

1. 愛知県渥美郡役所編『渥美郡史』復刻版 臨川書店、1987年。
2. 泉田英雄・伊藤晴康・西澤泰彦「豊橋ハリストス正教会の聖堂建築の研究 最近発見・発刊された資料による建設経緯と設計の分析」『日本建築学会計画系論文集』第75巻 第654号、2010年8月、pp. 1997-2005。
3. 内田多計男編『豊橋商工案内』昭和16年版、豊橋商工会議所、1942年。
4. 小尾堅之助編『愛知県実業家人名録』愛知博文社、1894年。
5. 郷土豊橋を築いた先覚者たち編集委員会編『郷土豊橋を築いた先覚者たち』豊橋市教育委員会、1986年。
6. 坂田泉「日本におけるハリストス正教会の建築について」『日本建築学会論文報告集』第103号、1964年。
7. 杉山校区総代会 杉山校区史編集委員会編『校区のあゆみ 杉山』豊橋市総代会、2006年。

8. 鈴木甲子男「正教会の聖堂建築（八）」『正教時報』1982年9月号，正教時報社，pp. 6-11.
9. 鈴木源一郎編『豊橋市神社棟札集成』愛知県神社庁 豊橋支部，2001年.
10. 鈴木澄衛編『豊橋商工案内』大正11年版—大正15年版，豊橋商業會議所，1922年-1926年.
11. 鈴木澄衛編『豊橋商工案内』昭和2年版，豊橋商業會議所，1927年.
12. 鈴木澄衛編『豊橋商工案内』昭和3年版—昭和15年版，豊橋商工會議所，1928年-1940年.
13. 瀬口哲夫・竺覚暁編『近代建築ガイドブック東海・北陸編』鹿島出版会，1985年.
14. 豊橋ハリストス正教会聖堂建築調査団『愛知県指定有形文化財 豊橋ハリストス正教会聖使徒福音者馬太聖堂建築調査報告書』豊橋市教育委員会 美術博物館，2007年.
15. 内藤昌康『火の見櫓慕情』春夏秋冬叢書，2008年.
16. 仲彰一『崇山獅子正宗禪寺誌』臨濟宗正宗寺，1981年.
17. 中神富次『故山の思い出』私家版，1967年（豊橋市中央図書館所蔵）.
18. 秦基「豊橋ハリストス正教会教会誌Ⅰ」『豊橋市美術博物館研究紀要』2号，豊橋市美術博物館，1993年，pp. 21-36.
19. 秦基「豊橋ハリストス正教会教会誌Ⅱ」『豊橋市美術博物館研究紀要』3号，豊橋市美術博物館，1994年，pp. 32-55.
20. 秦基「豊橋ハリストス正教会教会誌Ⅲ」『豊橋市美術博物館研究紀要』4号，豊橋市美術博物館，1995年，pp. 65-96.
21. 秦基「豊橋ハリストス正教会教会誌Ⅳ」『豊橋市美術博物館研究紀要』5号，豊橋市美術博物館，1996年，pp. 76-105.
22. 原田仙二郎編『豊橋商工案内』大正10年版，豊橋商業會議所，1921年.

